

信州大学大学院医学系研究科

循環病態学講座（松本市）の新藤隆行教授（46）らの研究グループは15日、ヒトを含む動物の体内でつくられるタンパク質「アドレノメデュリン（AM）」と「ランプ（RAMP）2」が、血管を正常に保つ仕組みを解明したと発表した。遺伝子操作を用いたマウス実験の成果で、血管の状態と深く関係する慢性臓器不全や動脈硬化など、多様な病気の治療法の開発につながる可能性があるという。

新藤教授によると、AMは血管をつくったり血管を広げて血圧を下げる機能を備え、RAMP2は機能制御の役割を担う。実験は血管と心臓のRAMP2を壊した成体マウスを使い、短時間で血管の壁の細胞が次々とはがれ落ち、心臓や腎臓、肝臓

血管維持するタンパク質の仕組み解明

信大・新藤教授グループ

が機能不全に陥る様子を確認した。

これまでの遺伝子研究では、AMまたはRAMP2を持たないマウスは胎児の段階で死んで

しまっていた。今回は両物質が成体において血管や心臓を維持するのに欠かせないこと、さらにRAMP2と病気との関係性も明らかにした世界初の事例だ

多様な病気治療に期待

としてい
る。19日付
の米専門誌

などに成果を発表する。

会見で新藤教授は「AM-RAMP2システムの機能を人工的に制御できれば、病気を初期段階で抑え込む新たな治療法を確立できる」と説明。システムの働きを高める化合物や抗体の研究を踏まえた、新薬の開発にも期待感を示した。

（小林達治）

研究成果について説明
する新藤教授

